

第11回 校長会議あいさつ

R8.1.21 稲垣

氷の張る朝もありますが、かたや梅の花も綻んできました。これから約2ヶ月は、担任等は、今年度のまとめと卒業式や新学年への取り組みの中で、子どもたちのステップアップに努める時です。一方、校長先生をはじめ四役等は、来年度に向けて、あらゆる配慮事項を遺漏なく集約しながら、教育課程や学校経営案の改善に尽力する時です。4月に力強く円滑なスタートができるように着実にお願いいたします。

本日は、ICT教育についてお話をします。昨年10月30日には、三和小で研究の成果が発表されました。「授業の効率化」と「個別最適化」に向けて、学年相応の日常的な活用法が幾つも提案され、参観者にとって分かりやすく取り組みやすいものとなっていました。その配慮により、市内全校の授業力の底上げに確実に寄与する発表となりました。協議会での活発な質疑応答がそれを物語っていたと思います。子どもたちの考えが瞬時に学級全体に共有され、それをもとに話し合いが行われたり、子ども個々の理解度に応じて練習問題等が提供されることが、ポピュラーな授業方法となることを期待しています。

三和小の発表では、公開授業に先立って、タイピング練習の様子も参観できました。タイピング練習が取り入れられてから、まだ2か月ほどでしたが、子どもたちの大半は、手慣れた様子で課題文を視写していました。協議会での授業者の説明から知ったことですが、ちょっと驚いたのは、授業中に自分の考えを書く際に、タイピングではなく音声入力を使っている子どももいたという事実です。

学習活動における「書く」ことの大きな狙いは、考えたことや感じたことを文章化させるプロセスを通して、思考力を培わさせることにあります。そこで、ひとりひとりの思考速度に見合うタイピングのスピードを身につけさせたいと考えていたのですが、音声入力が間もなく普及するとなれば、タイピングの価値も見直され、今後の授業の中での扱いも違ってきます。この懸念

をICTスーパーバイザーに尋ねてみたところ、子どもたちのタブレットには既に音声入力の機能は具備されているとのこと。しかしながら、音声によって、文章を校正する能力はないため、そこはタイピングで行うしかないのが現状ということでした。ただし、生成AIを組み込んだ場合は、文章の校正も容易になりますが、小中学生の場合、発達段階を考慮すると生成AIの導入には慎重を期するべきであり、義務教育段階では、タイピングの技能は必要ということでした。

寺子屋の算盤が電卓にとって代わられるまでには、人の一生分をはるかに上回る年月を要したため、算盤の技能は食い扶持となりました。しかし、今の小中学生が身につけるタイピングの技術は、いつまで必要とされるのでしょうか。生成AIに関わる機能は、恐るべきスピードで進歩しているそうです。ややもすると彼らが社会人になった時には、音声入力が一般化していく可能性がありはしないか。また、学校教育の面から考えると、音声入力によって文章を綴ることは、子どもたちの思考力の向上にどのように影響するのかという新たな教育課題が浮上してきます。旧知のICT教育を専門とする教授によれば、既に最先端では、プログラミングにしても、キーボードを必要とせず、専門家を除けば、プログラミング言語に精通する必要のない段階にきているとのことでした。生成AIは、その濫用は戒めなくてはなりませんが、一方で教育現場にもさまざまな形で恩恵をもたらしてくれる可能性もあります。このような点にもアンテナを高くしながら、三和小学校の提案を基盤にして、来年度以降始まっていく教育課程の柔軟な編成にも努めるようお願いいたします。